
銀河英雄伝説―涼宮遙の転生物語―

>>1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河英雄伝説―涼宮遙の転生物語―

【Nコード】

N3699X

【作者名】

<<1

【あらすじ】

これは滅ぶべき宿命を背負った世界で死亡し、銀河英雄伝説の世界に転生をしてしまったとある少女の物語。

転生者として生前の記憶あり、原作知識はありません。

前世では元軍人で修羅場を経験し、指揮者としてのスキルを元から有している、ちょっとだけチートな人です。

アッテンボロー家の養子で一つ上の兄がダスティさんですが、序盤がエル・ファシルからなので、ヤンやフレデリカと関わるようになります。

エル・ファシル編が終ったら幼少編を間に入れようかなと思っています。

主人公とオリキャラ五名十およびオリ部隊である第三七戦隊とは長い付き合いになるかもしれません。

なお【マブラヴ】【マブラヴオルタ】キャラの【涼宮遙】すずみやほるかが転生者ですが、本編は【マブラヴオルタ】のジェノサイドな要素は一欠けらもあります。

同盟側原作ルートを辿りながら、ある程度出世して影響力がでてから歴史分岐が発生します。

（＊ この小説はらいとすたっふるルール2004に則って掲載されています）

【0】エル・ファシルに降り立ちて―前編―（前書き）

■登場人物

涼宮遙Ⅱ ハルカ・シャーロット・アッテンボロー（18才／少尉）
リーゼロッテ・エンデ（18才／伍長）

＊オリキャラの名前はランダムルーレットで作っています

【0】エル・ファシルに降り立ちて―前編―

【?】

宇宙暦七八八年 帝国歴四七九年 四月

輸送船フローラの船内で、ハルカ・シャーロット・アッテンボロの顔が青白い光を放つモニターによって映しだされていた。

その目は遙か先の宇宙の果てに瞬く無数の星々の姿を映し出していて、その星々は肉眼で確認することはできない。

しかしそれも望遠モニターで調整して観ることができた。

しばらくして観るのに飽いたのか、モニターから目を離すと、ハルカは無重力の中、ふわりと体を浮かして寝台の上に手をかけて寝転がっていた。

ベレー帽から豊かな薄いマゼンタの髪が溢れ落ち、ハルカは癖のない髪を無造作に手早くまとめる。

同盟軍の軍服の襟元を緩めると、ベレー帽を顔に当てて目を瞑ってしまう。

洒落っ気の少ないその軍服は機能性を重視した制服だった。

低重力の宇宙で活動することが多いことからスカートは存在しない。

胸元の階級章は少尉のものだった。

本来なら重力制御が効いているはずだが、この老朽化した輸送船は動力部のエンジンが不調で電圧が不安定だった。

そのせいか真っ先に切られるのが重力制御装置だった。

ハルカは枯花のフローラとポートで誰かが言っていたのを思い出していた。

可愛い名前がなぜ枯れ花なのかの理由を知ったのはつい二日程前のことだった。

幸いなことに空調を切るようなことにはなっていないから寝れないこともなかった。

タンクベッドなどというものがこの老朽化した輸送艦にあるわけもなく、こうして硬いベッドに寝転がって、ようやく寝るのがここ数日のハルカに課せられた日課のようになっていた。

胸元からロケットが浮いて、薄目を開けたハルカの目に留まる。

暗い部屋に青白いモニターの光だけが存在していた。

そのロケットをハルカは開く。

中には小さな写真、一組の夫婦の姿が写っていた。

妻が抱くのは幼子、幼い日のハルカだった。

「父さん……母さん……」

その名を呼んで、ロケットの中の父と母の写真を指でなぞっていた。

不思議な話をしようと思う。

もし今の自分という存在が培ってきた時間と記憶以外にもう一つの人生と記憶が存在するとしたら？

そのもう一つの人生で私は死んでしまったのだと自覚している夢のような記憶。

世界に生まれ落ちた時の不可思議な感覚を私は覚えていた。
気がついた時、私は見知らぬ世界、見知らぬ時代にいた。

そこは宇宙を二つに分ける勢力である銀河帝国と自由惑星同盟との長きに渡る戦乱の世界だった。
知識にある時代から千年以上未来の時代。

いや、ここはまったく異なる世界だった。

かつての私の名前は涼宮遙すずみや はるかといった。

前世の記憶にある、私が生まれた地球はBETAという地球外生物と存亡をかけた争いを繰り返していた。

その世界で、私は……おそらく死んだのだろう。

新しく生を受けたこの世界にはBETAは存在しなかった。

地球は宇宙の片隅の存在となり、今では置き忘れられた存在となっていた。

時代も場所も過ぎ去りこの世界に生まれ落ちた。

なぜ前世の記憶を持ったままなのかはわからない。

転生、という言葉がなぜか記憶に残っている。

なぜなのかはわからないけれど、私はこの世界に転生したことだろう。

そしてここでも多くの命を散らす戦争が行われていた。

銀河帝国と自由惑星同盟。

いつ終わるとも知れない戦いの歴史。

繰り返してはいけないと思った。

大切な人を失う、そんな思いをもうしたくない。

私は私の守りたいもののために軍人の道を選んだ。

ハルカ・シャロット・フェアフィールド。

それが今の私の、もう名乗ることができない、もう一つの本当の名前。

そしてこのロケットだけが、失われたものとの唯一の絆を示すものだった。

寒い。

いつの間にか艦内の重力が元に戻っていた。
私は毛布をかき抱いて胎児のように身を丸めていた。
握りしめたロケットを離さないまま。

【？】

新任伍長のリーゼロッテ・エンデは、食堂に現れた同年代の少女に気がついて、半ば立ち上がりかけた。

彼女はリーゼロッテに気がつく、片手を上げて合図を送る。

簡易食事のビスケットをトレイに受け取ると、こちらに向かって歩いてくる。

居ずまいを正し、リーゼロッテは少し緊張していた。

「ここ、いい？」

「はい、どうぞ。空いています。アッテンボロー少尉」

思わず敬礼しかけた手を下ろしてリーゼロッテはそう答えていた。
目の前の人物はそういう形式張ったことがあまり好きではないと思いだしたからだ。

「うん、ありがとう」

たおやかに笑った彼女はリーゼロッテの正面に腰掛けた。
流れるような薄いマゼンタ色のストレートの髪は三つ編みにされていた。

その姿にリーゼロッテは惚れ惚れとした視線を向けていた。

「少尉、今日はゼリーカット入りですよ」

「うん」

そう答えて彼女は一枚のビスケットを口元に運んでいた。

そんな些細な仕草さえも絵になるのだ。

それに比してリーゼロッテ・エンデという少女はあまりにも地味な存在であった。

「私はエル・ファシルで普通の食事がしたいです。簡易食事はどうも味がなくて……」

「うん……毎日は確かに飽きるかもしれないわね」

「少尉、よろしければ向こうで機会があれば、一緒に晩御飯をどうでしょうか。もちろん、私が料理します。帝国風ですが……」

先程から考えていた誘いの言葉をようやく口にして、リーゼロッテは気恥ずかしげにトレイの最後のビスケットを口に運ぶ。

その手を彼女が追うように見ていて、うん、と小さく返事を返した後には頷いてみせた。

「リーゼさんの手作り。ぜひお願いします」

そして軽く頭を下げる。

「はい、その、ありがとうございます」

「ありがとうって言うのは私の方ですけど……」

「あ、いえ……」

小首を傾げた彼女の前で、リーゼロッテは赤面する自分の顔を引っ叩きたくなった。

「それより……」

「はい？」

「同じ年なんだから、二人でいる時はハルカって呼んでくれると嬉

しいんだけど」

「いや……そういうわけには」

「駄目？」

リーゼロッテは覗き込むような彼女の視線に抗しきれなくなつて、嫌ではありませんと答えていた。

「うん。プライベートでは私も伍長じゃなくてリーゼって呼ぶから」

「はい、ハルカさん」

「さん、はいらないよ？」

「うーん……ハルカ」

そして二人とも目を合わせて笑った。

周囲に無骨な軍人が多い中で、まだ少女とも言つてよい二人は同じ一八才であった。

かましいという程でもなく、談笑する二人の会話が漏れ聞こえてくる。

その二人に視線を投げかける者もあったが、一人は若いとはいえ少尉である。

無遠慮な非礼の視線はすぐにそらされることになった。

「ハルカさ……ハルカはすごいね。私と同じ年で少尉さんだもの」

少女特有の柔軟性から、すでに口調は上官へのものではなく、同年の少女に向けられる気易い口調に変わっていた。

同盟軍士官学校に早期入学を果たし、さらに卒業を一年繰り上げた英才のことは、なりたて伍長のリーゼロッテでさえ知っていた。憧れの存在といつてもよいこの同年代の少女は、さらに美貌まで兼ね備えているのだ。

控えめといつてもいい態度と、そのたおやかな姿は、リーゼロッ

テに羨望の念を抱かせるには十分だった。

誰に対してもその態度は一貫して優しげであったから、艦内で彼女と出会った人間は少なからず何らかの好意を抱いていたのだ。

リーゼロッテとて小柄ではあるが、赤みがかった金髪はそれなりに傲慢してもよいものであったが、いかんせん比べる相手が悪かった。

そして無遠慮な男どもの視線を遮るようにリーゼロッテは席を移動していた。

「運がよかったのよ」

そう言うハルカの口調は遠慮がちだったが、リーゼロッテはそう思わない。

運がよいだけで一八で士官学校を卒業して少尉にはなれない。

彼女には凡人に測れない何かがあるのだと直感していた。

それが何であるのか、目の前の落ち着いた雰囲気の少女から読み取ろうとしていた。

「ダステイ兄さんだって、本当は私なんかより優秀なもの」

「お兄さんですか？」

「うん、一個上だけど、早期入学で同級生だった時もあるから。それにもっとすごい先輩もいるのに、私が飛び級したのは凄く驚いたわよ」

「主席から四位でしたね」

リーゼロッテの言葉にハルカは肩をすくめてみせる。

まったく本意ではないというふうに。

その謙虚な態度は時に度が入り過ぎなのではないかとも思うのだが、ハルカ・シャーロット・アッテンボローという少女の人格を知るにつけ、それがこの人物の素の姿であると自覚するようになって

いた。

【？】

銀河連邦の成立から始まった、銀河史における宇宙暦の歴史は、その転換点を銀河帝国と自由惑星同盟の成立に求めることができる。宇宙に広がりを見せた、巨大な花の如き文化、文明の拡散と、惑星への移植によって人類は広大な宇宙を支配するに至ったが、社会秩序は停滞と倦怠、疲労と苦しみが満ち始めていた。

銀河帝国大帝、ルドルフ・フォン・ゴールドンバウム。

銀河帝国の礎を銀河連邦という巨体を打ち倒すことで打ちたて、ゴールドンバウム王朝を開いた男は無類なき独裁者であった。

鋼鉄の巨人と呼ばれたルドルフは政策、体制において旧世界の一つの秩序を復活させた。

貴族、王族という特権階級の復活である。

帝室を創り上げ、自ら選んだ優秀な人材に特権階級を与え、銀河帝国の番犬としたのである。

ありとあらゆる、有害とされた自由と娯楽は奪われ、彼に逆らうものは容赦のない弾圧と粛清の中に消えていった。

中でも悪名高いのが、劣悪遺伝子排除法である。

当時の帝国人口は三〇〇〇億を数えたが、警察や社会秩序維持局によって捕まり、処刑された民衆は四〇億を数えた。

おびただしい犠牲、それは全体の一・三パーセントにあたったが、それらはごく一部の抵抗者として扱われ、抹消されていたのである。

盤石となったゴールドンバウム王朝、その水面下で自由や共和主義を掲げる人々は長い冬の時代を迎えていた。

帝国暦一六四年、アルタイル星系で一握りの共和主義者達が声無き叛乱、即ち奴隷階級に落とされた共和主義者達が氷の宇宙戦を建造してアルタイル星系を脱出した。

それを実行したのは若きアーレ・ハイネセンと付き従った四〇万人の男女だった。

帝国軍に追われ、航海を繰り返しながら、彼らは無名の惑星に身を隠し、恒星間宇宙船を建造してまだ見ぬ未開の宇宙星域に向けて飛び立ったのである。

新天地の開闢！

一万光年の旅路の果てに指導者アーレ・ハイネセンは旅の半ばの事故で没したが、その意思は受け継がれ、人々は帝国の手が及ばない新天地に降り立った。

長征一万光年と呼ばれる長い旅は、半世紀以上に渡る長い旅だった。

帝国暦二一八年、共和主義を掲げる人々は新たな年表を定めた。銀河連邦の正当なる後継者であることを示す自由惑星同盟発足の年でもあった。

ときに宇宙暦五二七年のことだった。

バーラート星域第四惑星にその根拠地は置かれ、初代指導者アーレ・ハイネセンの名からハイネセンと呼ばれるようになった。

初期の人口はわずか一六万ほどであったという。

自由惑星同盟が成立する一方、銀河帝国と自由惑星同盟が初めて接触するまで百年以上の歳月を待たねばならなかった。

それまでに着実に人口を増やし続け、自由惑星同盟は国家としての礎を着実に築いていた。

初めての接触があったのは宇宙暦六四〇年のことであった。

戦艦同士であったが接触に戸惑った帝国側の戦艦は砲火を浴びて撃沈され、初の遭遇戦は同盟側の圧倒的な勝利に終わった。

そして銀河帝国は逃げ出した共和主義者達が生き延びていたことを知るのである。

巨大な銀河帝国に対し、自由惑星同盟は矮小な存在に過ぎなかったが、一万光年という距離が両者の戦いを積極的なものに成し得なかったのが事実だった。

それは後に距離による戦いと呼ばれるようになる。

現在のように航路の確保やワープ技術が迫いついていなかったこともあり、自由惑星同盟側はただ待てばよかった。

何より同盟には名将が存在していた。

同年のダゴン星域の会戦において、自由惑星同盟は銀河帝国を一方的に打ち破り、史上屈指の殲滅戦を展開し勝利した。

自由惑星同盟の存在を銀河帝国側に鮮明に焼き付けることに成功したのである。

これにより銀河帝国の不当な支配を退けるに足る勢力の存在を知った、帝国の共和主義者達や不穏分子達が故国を脱出し、自由惑星同盟に走ったのである。

自由惑星同盟は膨れ上がり、最盛期を迎え、一地方の反乱勢力から銀河帝国に比肩する巨大国家としての立場を磐石なものとしたのだった。

しかしそれは巨悪の実をも内包することになったのだが、それから数百年、未だ両者は戦い続けていた。

お互いの尾を喰らいあう双蛇のように……。

そして現在、惑星エル・ファシルにおいて一つの戦いが始まろうとしていた。

それは銀河史においては小さな事件、小さな戦いにすぎない。

ときに宇宙暦七八八年、帝国歴四七九年、四月末。

一人の少女がその運命の地に降り立とうとしていた。

【1】エル・ファシルに降り立ちて―後編―（前書き）

■登場人物

アーサー・リンチ（少将／エル・ファシル警備艦隊司令）

ヤン・ウェンリー（中尉／21才）

リーゼロッテ・エンデ（伍長／18才）

ハルカ・シャーロット・アッテンボロー（少尉／18才）

ジョニー・キャボット（准尉）

＊オリキャラの名前はランダムルーレットで作っています

【1】エル・ファシルに降り立ちて―後編―

【？】

――エル・ファシル警備艦隊――

エル・ファシル警備艦隊司令、アーサー・リンチ少将は苛立ちを隠せずに手元の資料を目の前に放り出した。

今読もうとしていた書類の内容を忘れ、リンチ少将は苛立ちを表すように指先をテーブルに何度も叩きつけた。

目の前で副官が恐縮そうに立ち尽くしている。

「その話は事実かね？」

「確証はしかねますが、帝国軍がエル・ファシル宙域に侵入する可能性があります」

「馬鹿なことを、帝国軍がこのエル・ファシルに来るというのかね？」

リンチ少将の厳しい視線を受けて副官は俯いた。

「帝国軍がエル・ファシルに現れるなどありえん。この時期に現れるのはせいぜい海賊程度だ」

「しかし帝国軍の哨戒艇と思わしき艦艇が目撃されています」

「思わしき？」

「は……」

「その程度の情報で、君は帝国軍がエル・ファシルに侵攻してくると主張するのかね？」

「それは……」

「ただの哨戒艇、もしくは海賊連中の艦艇ではないのかね？」

「その可能性は否定できませんが……」

「放っておけ」

「は？」

考え込んだような素振りの後にリンチ少将がそう告げて、副官は戸惑いの目を向ける。

それを邪険に払うように手を振った上官に敬礼して、副官はその場を立ち去った。

入れ替わるように冴えない風貌の若い中尉がリンチ少将の前に立った。

黒い髪に黒い瞳の青年はベレー帽に手をかざして敬礼する。

「ん、何かね君は？」

訝しむように見上げたリンチ少将が、そのうだつの上がない青年を睨みつける。

青年の上官に敬礼する姿はまったく締まりがなかった。

「ヤン・ウェンリーです、閣下。御用があると伺って参りましたが」「ああ……」

そう言われて思い出したのか、リンチ少将はろくに読んでもいない放り出した書類を指さした。

「ヤン中尉、君に任務を与える。士官学校出のひよこが来るから君が面倒をみたまえ」

「は、はあ……それが任務でしょうか？」

「そうだ。優秀らしいぞ。卒業成績は上位四位だったらしいがひよっこだ」

そう吐き捨てた上官の様子にヤンはやれやれと内心溜息を付いた。この上官殿のエリート嫌い、いや優秀嫌いは筋金入りらしい。

特に優秀な部下に対して、リンチ少将の何とも言えないいびりがあったりするのだが、ヤン自身は士官学校での成績は不可もなくといったところだった。

いやむしろ落第寸前だったのだが、ヤンもこの上官に嫌われている節があった。

あまり関わっていたくないのでヤンは資料を受け取って脇に挟んだ。

「任務受領しました。新人教育ですか？」

「馬鹿をしないよう君が見ている。どうせ君もやることなどないだろう？」

「はあ……」

「行きたまえ。私は忙しいのだ」

「失礼致します」

ヤンはおざなりな敬礼をして背を向ける。

新人教育ねえ……と、部屋を退いた後、ヤンは思い切り溜息を付くと肩を落として歩き出した。

【？】

「では少尉、私はこれで」

輸送船のタラップで、リ zeroes エンデ伍長の敬礼を受けてハルカも答礼を返す。

二人が降り立った軍港の周囲は騒がしく、ひっきりなしに輸送カ
ートが輸送物資を港の倉庫へと運んでいく。

「駐留艦隊の本部センターまではお迎えが来てると思いますから」

「リーゼは一緒に来ないの？」

「はい、私は直接勤務地に向かいます。とはいっても場所はここな
んです」

「そうなの？」

「はい。あ、元帝国人で編成された部隊があつて、第三七戦隊つて
言うんですけど、そこに所属になります。部隊が地上勤務になつて
まして」

「第三七戦隊ね」

「落ち着いたらメールを送るんで」

「うん、美味しい晩御飯楽しみにしてる」

「あは」

はにかんで笑うと、リーゼロッテはそれではと告げて去る。

リーゼロッテの後姿を見送って、ハルカはエル・ファシルの青い
空を見上げた。

宇宙暦七八八年、帝国暦四七九年、四月二八日、ハルカ・シャー
ロット・アッテンボロー少尉はエル・ファシルの地を踏んだ。

やがて訪れる騒乱と戦いが己の運命を大きく変えることを知らず
に。

本部センターに確認の電話を入れるとすでに迎えに出ているとい

う。

たかが少尉に過分な出迎えといってもよかった。

「実際、それほど距離が離れているわけでもないのだが、何か理由があるのかと勘ぐってしまう。」

「迎えてあれかな？」

ハルカがそれらしい車に乗った軍服姿の青年を見つけると、向こうもハルカに気が付いたようだった。

そのままこちらに向かってくるのが見えて、目の前に来るタイミングに合わせてハルカが敬礼すると相手も答礼を返した。

「アッテンボロー少尉ですね？ 本部のジョニー・キャボット准尉です。お迎えにあがりました」

「わざわざありがとうございます。あの、一少尉に少し大げさな気もするのですが……」

控えめにハルカが切り出すとキャボット准尉は苦笑いをする。

「いくつか理由があるんですよ。市内を軍服着て歩くのはここでは少し勇気が要ります」

その言葉から、エル・ファシル市民と軍人との間に何らかの軋轢があることを汲み取れたが、ハルカは促されるまま車に乗り込んでいた。

車が走り出し、窓から見える風景はごく普通の都会といってもよい。

ハイネセンポリスと比べれば辺境惑星の田舎都市なのだが、垣間見える市民の生活の姿はそれほど変わるものでもなかった。

走り出してから十分あまりで車は本部センターに到着していた。

【？】

「先輩、起きてください。先輩」

まどろみの瞬間を邪魔されて、ヤン・ウェンリーは不機嫌に目を覚ます。

睡眠を邪魔される不快感というものは何時になってもなれるものではない。

しかしどこか懐かしい声と香りに肩を揺り動かされて、ヤンは寝ぼけて答えていた。

「なんだい、アッテンボロー。あと五分寝かせてくれ」

ベレー帽を目深に下ろしてヤンは椅子の上で器用に寝返りを打つ。

「五分ありません。待ったもなしですよお」

あきれたような少女の声が響き、寝ぼけていたヤンの灰色の頭脳もようやく起きだしていた。

「ん？」

現実のその声に目を覚ますと資料室の天井が見えた。

すぐ傍に立つ気配にヤンは顔を上げる。

まだ焦点の定まらない目で、目の前に立つ新任少尉をヤンは呆けた顔で眺めていた。

「君か……」

ハルカ・シャーロット・アッテンボローは微笑んで目覚めたヤンを出迎える。

「おはようございます先輩、こんなところで寝てると風邪を引きますよ?」

「生憎と昔からコンソールとの相性は抜群だね。風邪を引いたことはないよ」

「はあ……ヤン先輩は酷いと思います。はるばるハイネセンから後輩がやってきたのにのんびりお昼寝してるんですから」

「まあね、どうせ放っておいてもここに来るだろう? 私は新人教育のために英気を養わなくちゃいけないんだ」

ヤンは起き上がると目の前に立つハルカは道を空ける。

資料室はかなり狭いのだ。

うん、と軽く背伸びをすると、ハルカの目の前だということもはばからないで大きなあくびをして見せた。

「ダスティは元気かい。ところで、君が卒業するの来年じゃなかったっけ?」

「兄さんは元気ですよ。それと私は今年卒業しました。飛び級したってメールでお知らせしたじゃないですかあ。ごたごたしてたのは知ってますけど、ちょっと酷いです……」

「あー……そうだったね、すっかり忘れていたよ」

抗議するようなハルカの非難を受けると、ヤンは天井を見上げて、少しはねた黒髪をかいてみせる。

そして今さらのように手元の資料に目を通す。

「なるほど、優秀だね。エル・ファシルの辺境警備艦隊なんかよりはハイネセン本部が欲しがりそうなもんじゃないか」

「あまりそういう言われ方をされるのは好きじゃありません」

少しすねたような顔でハルカが答える。

「ここのお偉方はね、とんがってたり優秀なのがお嫌いなんだよ。目をつけられたくなかったら適当にやってくれ。まあそれは置いとこう。よく来たねハルカ、初めての部下が後輩で助かったよ」

「はい、よろしく願います」

ヤンが差し出した手をハルカが握り返す。

「とにかく、私等のやることは上じゃ、ないと思ってくれている。もっぱら下のこっち関係で動くことになると思う。何せ苦情処理係りなんてやらされててね。実にやりがいのある仕事だよ」

その口調はすでに放り投げたような響きを持っていて、当のヤンは暑苦しいのかベレー帽を顔に扇いで見せた。

「苦情処理ですか？」

「軍とエル・ファシルの市民の間はあまり良くなくてね。素行の悪いのが下に降りてることもあって何かと問題視されてるのさ」

「そんなに問題なのですか？」

「そうだねえ……」

二人一緒に資料室を出て、歩き出したヤンの足の向くままにハルカはついていく。

「うーん、問題にしたがる連中がいるってことがあるねえ」

「はあ……」

「紅茶でいいかい？」

ヤンが販売機を指差す。

ハルカは一瞥するが特に迷わず紅茶と答えていた。

二人に共通するのは紅茶が好きということだ。

もつともこんなところの紅茶では二人とも満足はしなかったが。

ハルカは熱い茶色の液体が入ったカップを受け取る。

ビル二〇階の窓際からエル・ファシルの町並みが一望できた。

「知つてのとおり同盟には帝国からの亡命者も多い。そして彼等も兵役に就くんだが、大概帝国出身者というものは一箇所に集められやすいんだ。エル・ファシルも同様でね。上の警備艦隊と切り離されて地上勤務に就いている」

帝国亡命者の集団で特に有名なのは薔薇の騎士連隊だ。ローゼンリッター

だが彼等には不名誉な逸話も伝えられていて、元帝国人に対する同盟側の信頼は決して篤いものではなかった。

つまりはそういった同盟側のひずみのようなものが不協和音を生み出しているのである。

ハルカは先日親しくなった同年代の少女の顔を思い浮かべていた。

「地上部隊というのは？」

すでに予想はついていたものの、ハルカはその問いを口にした。た。

うん、と答えてヤンはカップに残った茶色い液体を飲み干してクシャリと潰した。

「エルファシル警備艦隊、第三七戦隊、駆逐艦タイガーフット。今軍港にいる連中だよ」

【1】エル・ファシルに降り立ちて―後編―（後書き）

続きはまたあとで更新。

この読み物はそうやって書かれるので、なろうの作法は一切無視することになります。

1つだけ言っておく・・・（・ω・）恋愛要素はあってもOK？

【2】第三七戦隊へー前編ー（前書き）

■登場人物

フランツペーター・ガームリヒ（中尉／24才／駆逐艦、タイガー
フット艦長）

アマーリエ・ドレイヤー（准尉／22才）

ゴッドフリード・ドレイヤー（中尉／24才）

ハルカ・シャーロット・アッテンボロー（少尉／18才）

ヤン・ウェンリー（中尉／21才）

ジョニー・キャボット（准尉／21才）

*オリキャラの名前はランダムルーレットで作っています

【2】第三七戦隊へ―前編―

【？】

自由惑星同盟と銀河帝国の一五〇年に及ぶ長き戦いの歴史の中で、銀河帝国から自由惑星同盟へと亡命する人々の中には、自由主義者や共和主義者といった思想犯以外にも、政治闘争や貴族、皇族同士の権力争いに敗れた帝国の政治家や貴族が数多くいた。

来るものは拒まずの民主政治を掲げる自由惑星同盟はこれらの亡命者を受け入れ、そして組織の中に組み込み内包していったのである。

それは小さな芽に過ぎなかったが、銀河帝国が抱えていた内面的な歪みをも抱えることになったのである。

銀河帝国との戦いが長引くにつれ、建国当初の志は忘れ去られ、帝国との戦いがすべてに置き換わってしまった。

思想の違い、国家体制の違い、両者の争いの根本はそこにあったが、もっともわかりやすく彼等を戦争に駆り立てたものは憎しみであった。

互いに互いを滅ぼすまで終わらない戦いは両社会を変質させたと言ってもいいだろう。

銀河連邦の最盛期、人類の人口は三〇〇〇億を数えたが、現在は四〇〇億を数えるに過ぎなくなっていた。

一度の会戦で、何一〇万か一〇〇万を数える死者を生み出すのだ。かつての地球の歴史にある戦争とは規模や桁数そのものが段違いに異なった。

その分、多くの悲しみと苦しみを撒き散らし、人々は憎しみという負の連鎖に捕らわれていったのである。

帝国亡命者は元帝国人ではあるが、正式に自由惑星同盟の市民権を得た人々であり、定められた法律により、いかなる迫害をも享受しない立場を与えられていた。

しかしながら元帝国人であるというただ一点において、彼等の存在そのものに疑念の目を向ける輩も存在したのである。

エル・ファシル警備艦隊、第三七戦隊所属のフランツペーター・ガームリヒ中尉は自棄酒を煽っていた。

バーの中でカウンターに座るのは彼一人、身の丈二メートルはあろうかというその背中は、まるで熊が座っているかのような印象を周囲に与えていた。

彼に近よる者はなく、席に着く客は一樣に彼を避けるようにして遠巻きに見ていた。

「何が自由の国だよ……俺の先祖様はこんなちっぽけな自由のために戦ってきたんじゃないやねえ。何が自由惑星同盟だ、自由万歳だ……くそつたれだ」

すでにろれつの回らなくなった口で呟き、空になったグラスを前に置いた。

「酒」

「もうよした方がいい」

馴染みのバーテンがペーターに声をかけるが、一言、酒と繰り返す男の声に諦めてグラスを手を取った。

カウンターに再度置かれたグラスを手に取りろうとしたペーターの横から腕が伸びて、濃縮された濃い色の液体が入ったグラスは奪い取られていた。

「中尉、もういい加減にしてください」

「あ？」

女の声が響き、酒に酔った愚鈍な眼を横に向けると、肩まであるシルバーグレイの整った髪に青い瞳を持つ女がペーターを睨みつけていた。

「ああ、これはこれは、アマーリエ・ドレイヤー准尉じゃないか。お前も飲みに来たのか？」

「違います。連れ戻しに来ました」

「俺は休暇中だよ」

むすっとした顔で酒臭い息を吐いて、ペーターは部下の准尉に向き直った。

「新人の着任式があったんですけど、メール見てないんですか？」

「ああ……携帯置いてきたからな」

「中尉……もっと責任持ってくださいよ」

「給料分は働いてるさ」

あきれたようなアマーリエの視線にペーターは飄々と答えて見せた。

「酒……」

ペーターの目はグラスの酒に注がれている。

「不良酒なんかこうしてやりますっ」

アマーリエは少し意地悪に笑うと、手の中のグラスの液体を一気に飲み干していた。

焼け付くような咽喉へのアルコールの強い刺激に、一瞬頭がくらりとするが、口をぬぐってワイルドに笑って見せた。

見事な飲みっぷりと言ってもいいだろう。

「それ、俺の酒だ」

空になったグラスをペーターが名残惜しく見つめた。

「あーあ……」

「艦長なんだから駄目ですっ、もっと示しをつけてください」

アマーリエがペーターの腕を引っ張って立たせようとするが、いかんせん熊のような大男だ。

その体重の半分もない彼女では一寸たりと動かすことはできなかった。

そのときバーの扉が開いて若い客が数人入ってくる。

そして軍服姿でバーに座る軍人を見つけて囁き合った。

アマーリエはその様子に気がついて悪い予感がしていた。

早くここを出なければならぬ。

「ほら、中尉ってば」

「うるせ」

まるで子どものようだ、とペーターより二才若いアマーリエは内

心ため息をつく。

「おい見ろよ、軍人様がこんな時間に若いねーちゃん連れて午前様かよ」

「いい気なもんだな」

「おい、こいつ、虎のガームリヒじゃねえか？」

その方向にペーターは顔を向けるがすぐにカウンターに視線を戻した。

酒が入っているのか、若者数人はペーターに絡むのを止めようとしない。

「役立たずの酒飲みってのは本当なんだな？ あんたら軍がいるおかげでこっちに物資が回ってこねえんだ。楽して女はべらせて大層なご身分じゃねえか、このバカ虎がよお。でけえ図体しやがって、役立たずのろくでなしじゃねえか」

「大方帝国のあばずれ女が虎とやっちまって生まれたんだろうよ」

下品で安っぽい挑発にアマーリエは眉をしかめる。

普段ならペーターがこの程度の挑発に乗ることはない、だが今は酒が入っている。

「何から生まれたって？」

声質の変化に危険を察知すると、アマーリエは慌ててペーターの軍服の裾を掴むが、その手は振り払われていた。

据わったペーターの眼を見て、彼女は避難するように身を翻すと部屋の隅に逃れた。

こうなっては止める手段が彼女にはない。

携帯を取り出して緊急コールをかけていた。

【？】

「派手に暴れてくれたな」

シルバークレイの髪を撫で付けて、ゴッドフリード・ドレイヤー中尉は部屋の隅で不貞寝するフランツペーター・ガームリヒ中尉に声をかけていた。

ドア越しの覗き窓の向こうは営倉室だった。
暗い室内は狭く、ベッドだけが見える。

「うるさいぞゴッドフリード、頭が痛い」

「飲みすぎだ。罰として中和剤の投与は禁止だ。一般人相手に虎が暴れてるって通報されたらしいな。警察に射殺されなかっただけありがたいと思えよ」

いかつい眉を歪めて、二日酔いに濁った赤い目をゴッドフリードに向けて、ペーターは唸って見せた。

その様は虎というより熊が唸っているかのようなだったが、そんなどうでもよい感想をゴッドフリードは飲み込んで話を続けた。

「民間人相手の暴行。一週間は出られないと思えよ？」

「はん」

吐き捨てるように応えたペーターは壁の方に顔を向けて横になる。相も変わらず吐き気が胸の内に湧き上がってくるが、すでに吐き出すものは吐き出していたから、口の中に苦くて酸っぱいものがこみ上げたのみだった。

「というところだが、幸いなことに担当官殿が口を利いてくれてね。」

出られるそうだ。あと一日は大人しくしてろ」

「担当官？ 本部のか」

「ああ、苦情処理係の中尉殿だったかな。後で会うだろうから礼は言っておけよ？」

「どうせ嫌味しか言われないさ」

「はじめはつけておけよ？」

「わかってるさ」

ふう、と息をついてゴッドフリードは宮倉室から身を引き離す。

困ったもんだ、とベレー帽をかぶりなおす。

妹のアマリーエから緊急連絡を受けたものの、酒場にゴッドフリード達タイガーフットの面々が到着した時は市民ではなく、警官相手に遣り合っていたのだ。

スタンガンでペーターを大人しくさせたものの、説教を食らったのは勿論、店の修理代や謝罪に奔走することになったのだ。

店のバーテンダーからは当分は出入り禁止を言い渡されたのだが、それを伝えるのを忘れていた。

まあいいか、とゴッドフリードは肩をすくめる。

「兄さん、どうだった？」

本部ロビーに出るとアマリーエが立ち上がって出迎えた。

その隣に見かけない女性士官がいたが妹の問いに先に答えていた。

「あれでは話にならん。あと一日、酒が抜けるまでは大人しくしてもらうことになった」

「そう、よかった」

「あまりいいとも言えない状況だな」

ゴッドフリードはすぐ傍にいる女性士官に目を向ける。

穏やかなグリーンアイに薄淡いマゼンタカラーの髪を三つ編みにした、まだ若い娘だった。

おそらく妹のアマリーエより年下だった。

少女と言っても通じるくらいだから、ゴッドフリードは士官学校出の新人であると予測していた。

「こちらはアッテンボロー少尉よ。艦長が出れるよう書類の手続きをしてもらったの」

「ハルカ・シャーロット・アッテンボロー少尉です。この度はご足労様でした」

ゴッドフリードに敬礼する様は慣れていて少し驚いたが、それは顔に出さずに答礼を返す。

「ゴッドフリード・ドレイヤー中尉です。本部の方にご迷惑をかけて申し訳ない。あれも反省しているのでご容赦を」

「あ、はい。大丈夫です。お酒はほどほどにとヤン中尉が仰っていました」

「徹底させます」

ヤン中尉、確かまだ若い青年だったな、とゴッドフリードの脳裏に冴えない男の顔が思い浮かぶ。

「ヤン中尉はどちらに？」

「今は苦情係センターにいますけど」

「そうか、迷惑をかけたので後日お礼に伺うとお伝えください」

「はい、承りました」

彼女の受け答え一つ一つが柔らか味を帯びていて、ゴッドフリーの警戒心は霧散していた。

「では失礼、ドレイヤー准尉、行くぞ」

「はい、では少尉。うちののん兵衛艦長をお願いしますね」

アマーリエの言葉にクスクス笑う素振りを見せて、アッテンボロ少尉は頷いて見せた。

その笑顔が印象的で、ゴッドフリーの胸の内にある種の余韻を残していた。

二人は連れ立って本部センターを出ると、待たせていた車に乗り込んでビルを後にした。

【？】

「だいたい、あらかた終わったようだね」

「お疲れ様ですヤン中尉」

今日一番の特大のため息をついて、ヤンは苦情処理係室のコンソールの前から立ち上がった。

「キャボット准尉に手伝ってもらって助かったよ。兼任なんてするもんじゃないな。給料以上の超過勤務だよ」

「中尉には苦情処理係の仕事の方が合ってるんじゃないですか？」

「そうかな？ 私としては一日、本でも読んでいられる仕事をしたいかなあ」

顎をこするヤンに苦情処理員のキャボット准尉が苦笑を向ける。本人としては本気で言っているのだが、どうやら冗談と受け取ら

れたようだ。

二人は休憩の一服に待合室に向かう。

「しかしまあ、市民の負担はかなりのものだね。生活レベルで影響を及ぼしている。軍事物資としての徴収が多すぎるんじゃないか？」

「駐留部隊の兵士だけで二〇万人、人口三二〇万程度のエル・ファシルでは正直、口を賄いきれるものではありません。辺境星系の警備艦隊はどこも似たり寄ったりらしいですが、エル・ファシルは帝国に近い分、あまり手薄にできない現状があります。ですからどうしても一〇〇〇の艦艇と兵士二〇万は必要不可欠になります。苦情の多くが軍と市民の間のトラブルなのもそこに原因がありますね」

「そして影で物資の横流しがあるというわけか……中央から離れるほど腐敗は蔓延していく。賄賂に横領、すべて金、金、金か……」

待合室のソファに足を投げ出して、だらしなくヤンが寝転ぶ。

軍の物資が横流しされているという憶測はヤンの妄想ではなかった。

事実、物資の出入記録を見れば不自然な項目は数多くあり、用途不明のコンテナが存在したりと枚挙には暇がない。

しかしそれを調べる権限を持ち得ない上に、それを調べるができる機関も辺境には存在しなかった。

事実、辺境のいくつかは半ば不法の蔓延地帯となっていた。

「いっそ帝国でも攻めてくれれば存在意義を盾にできますけど、最近では海賊相手が多いですからね。軍の方でも不満が溜まっています。こちらは中尉の方がご存知だと思いますが」

「第三七戦隊とかね」

今日もその艦長が大暴れしてくれたところだ。

本人は営倉入りとなり、始末書を書かせたが、彼の負担はそこま

で、諸々の弁償やら各所への対応はすべてヤンに回されていた。しかしあまり長く拘禁しておくのも業務上の問題が生じるので、反省文を書かせた上で、ヤンの監視つきを条件に営倉から出る運びになったのだ。

「管理職になんてなるもんじゃないな。特に揉め事が約束された問題児のね」

「ご愁傷様です」

キャボット准尉は十分に同情していたが、それくらいは耐えてもらわねば、私だって胃薬を手放せないんだぞ、とその表情が雄弁に物語っていた。

エル・ファシルに駐留する部隊の中に爪弾きものの戦隊が存在する。

銀河帝国からの亡命者及び、その子孫から編成されるエル・ファシル第三七戦隊である。

帝国人といっても先代がそうであっただけで、今では自由惑星同盟の市民であり、同盟軍内部においては建前上の差別はないことになっているが、帝国出身者の出自を持つ兵士は隔離しておこうという風潮が今なお強く存在していた。

エル・ファシル第三七戦隊は地上警備の名の下に、そのほとんどが地上で勤務を命じられていたが、実質は監視の元に粗探しをされる日々であった。

修理の必要のない戦隊の艦艇、駆逐艦タイガーフットもドックに終日駐留となっている。

このタイガーフットもいわくつきの老船で、元々は帝国軍の艦艇

だったが、二〇年前に銀河帝国から亡命してきた貴族が乗っていたものだった。

その当時の艦名はすでに不明である。

その後改装を重ね、エンジンも取り替えているが、未だに現役の艦艇であった。

今なお廃艦にならずに存在するのは、まともな機能水準を最低限満たしているからであった。

警備艦隊内では老朽艦呼ばわりされ、元帝国人が多いことから軽視されがちなタイガーフットは、いまだ戦場に出たことがなかったのも嘲りを受ける要因ともなっていた。

老いた虎と馬鹿にされることも多く、第三七戦隊の隊員の中でも不満の声が高まっていた。

先日起きた酒場の騒ぎも軍と市民の確執と軋轢が浮き彫りになったものであった。

そのとぼつちりを受けるのが地上勤務についている第三七戦隊の面々であることが多く、問題児集団として白眼視されていたのである。

【3】第三七戦隊へ―後編―（前書き）

■登場人物

ヤン・ウェンリー（中尉／21才）

ハルカ・シャーロット・アッテンボロー（少尉／18才）

バルバラ・パツフェルベル（曹長／26才）

フランツペーター・ガームリヒ（中尉／24才／駆逐艦、タイガー
フット艦長）

ゴッドフリード・ドレイヤー（中尉／24才）

＊オリキャラの名前はランダムルーレットで作っています

【3】第三七戦隊へ―後編―

【?】

――五月一日――

エル・ファシル駐留艦隊本部センタービルの一室で一組の男女が向かい合っていた。

「辞令、ハルカ・シャーロット・アッテンボロー少尉。本日五月一日をもって第三七戦隊への勤務を命じる」

「謹んでお受けいたします」

ヤンが形式的な辞令の訓辞を述べると、真剣な面持ちでハルカがそれを受けて敬礼をすると、ヤンも適当に返してソファに座った。ヤンが座るように促してハルカもソファに腰掛けた。

「部下ができて楽できると思ったらこれだよ」

本気か冗談ともつかない台詞を吐くと、ヤンはベレー帽に指を引っ掛けて廻し始めた。

上司の威厳など微塵にも感じられなかった。

案外本気で言ってるのではないかとハルカは解釈していた。

「本当ならここに着いた日に辞令が下りてるものなんだが、どうにも適当だね。正式にどこに所属させるのか決まっていなかったんだ。どこも通信オペレーターが不足してるんだが、私のとこに来たからには知り合いの人事担当官に無理やり捻じ込んできたよ。第三七戦隊からも人を回せてせっつかれていたんだ。君なら十分やってい

けるはずさ。何せ情報管制のプロだからね」

「えと……先輩、質問をしてよろしいでしょうか？」

「何でもいいよ」

片手を挙げて問いを發したハルカにヤンが許しを出す。

学生時代、ヤンは控えめに見えるがこの勉強熱心な後輩に何度も質問攻めにされて、その対応のためにマニュアルを作っていたこともあった。

そして大概が一度では終らないことも度々あった。

「ヤン先輩は幕僚士官のはずなのに第三七戦隊の地上担当官なんですよね。何で苦情処理係まで兼任しているんですか」

「単純に言うとは押し付けられたのさ。何もしてない暇人だと思われるしね。実際やることなんて宇宙に出てない限りほとんどないし、上は下のことにまったく興味がなくてね。見栄っ張りな司令官殿はご自分の印象ばかり気にしている人なのさ」

「アーサー・リンチ少将でしたね。中央にいた頃はそれなりに優秀な方だと聞いていましたけど」

ヤンの手からベレー帽が外れて宙を飛んだのをハルカが受け止めて、それをヤンに差し出す。

「君ってどこに情報網を持っているんだい？ 確かに優秀だったらしいけどね、エル・ファシルに着任してからの司令官殿は自己保身の塊だね。えーと、これはここだけの話で秘密だぞ」

「はい、勿論です。秘密は厳守いたします」

そう言ってくすりと笑うハルカに、ヤンは真面目腐った顔でシーと口に指を当ててみせた。

「近い内に警備艦隊の軍事演習があるんだが、司令官殿はマスコミと政治家を呼び込んでデモンストレーションをするつもりらしい。テレビ局も一緒にね。政治宣伝に軍と自分の地位を利用するあたり、どうも信用を置いていい人物ではないな。少なくとも私は命を預けたいとは思わない」

あけすけな上司への批判だったが、ヤンの性格を知るハルカはその評価を胸の内にしまい込む。

「はい、他言はしません。でも私が第三七戦隊に配属ということは宇宙に上がることもありますか」

「そうだね、その可能性は高いよ。上も長いこと連中をこっちに置いておくことのデメリットにいまさら気がついたようだね。さっきの辞令も今日発行されたものなんだ。虎を地上に置いておくのは危険だね。地上に放し飼いにするよりはいいだろう？」

「虎ってガームリヒ中尉ですか？」

「なかなか個性的な男だったろう？」

ヤンがハルカの質問に質問で返した。

「見かけによらず丁寧な人でしたね」

「酒さえ入らなければ、という注釈がつくけどね」

先日、営倉室から出て復任の挨拶をしにきた巨漢の中尉の名をハルカは思い出していた。

柔らかい栗毛にいかつい顔と二メートルの体躯を持つ、まさに熊という一言が似合う青年だった。

熊のようにでかい図体でありながら、ヤンに丁寧に礼を言う姿に、人は見かけによらないものだという印象をハルカに強く抱かせていた。

「それと私も本日を持って苦情処理係は解任らしい。正直こっちの水も悪くなかったんだけどね」

ベレー帽をかぶりなおしてヤンが立ち上がり、それにならってハルカも立ち上がる。

「キャボット准尉が嘆きますね」

「嘆かせておけばいいさ。あれは人の愚痴を訊くために生まれてきたような男だからね」

二人は顔を見合わせると、共犯者のようにくすりと笑い合った。士官学校時代、アッテンボロー家の兄と妹は、ヤン・ウェンリーとジャン・ロベール・ラップを交えて、同じ席を囲んでは、先輩後輩を越えた付き合いをしていたものだった。

「では一足先に私は宇宙に戻るとするよ。戦隊のドレイヤー中尉は目端の利く男だから頼りにするといい。あっちは女傑が揃っているし、噂と違ってアットホームだからね。君のことだから心配は要らないと思うけど」

「はい、問題ありません。ヤン先輩、ありがとうございました」

「あ、いや……体には気をつけて」

「はい」

丁寧に頭を下げるハルカにヤンはそう告げると、背を向けて立ち去った。

その後をしばらく見送ってから、ハルカは港のある方角を眺めていた。

【？】

ハルカが駆逐艦タイガーフットに乗り込んだのは午後も大分過ぎた頃だった。

ガームリヒ中尉とドレイヤー中尉に着任の挨拶を済ませた後、ハルカは通信士官として尉官用の個室を与えられていた。

狭いながらもその部屋に荷物を押し込んで、ようやくハルカは一息ついたところだった。

タイガーフットという艦独特の空気なのだろうか、艦内の雰囲気は意外なほど規律が守られていた。

インターフォンが押されて返事をする、小さなモニタに赤毛の女性兵士の顔が映る。

「失礼します。小官は砲術士官のバルバラ・パツフェル曹長です。アッテンボロー少尉、お時間があれば艦内をご案内いたします」
凜としたよどみのないきはきとした口調だった。

「はい、いいんですか？」

「はい、ご自分で周られてもいいんですが、男所帯なもので、うっかり男連中のところに立ち入ると後悔することになったりしますが」
「あ、それはあれですねえ……」

曹長の言葉にハルカは言葉を濁す。

規律が守られていても見えない部分もあるわけで、女性兵士も最近は多くなっているが、男と女である。

そういった意味でのトラブルも増えているのだという。

「お願いします」

フォンの前でハルカがお辞儀をすると扉が開く。

入ってきたのは予想以上の女性だった。

身の丈は一八〇を越えているだろうか、筋肉質であるようでしなやか体軀はバランスの取れたグラマラスなボディを誇示していて、無骨な軍服を着けていてもそのラインを崩していなかった。

見事な赤毛の髪はウェーブを描き肩まで伸びていた。

野性的なブルーアイが見下ろして、一瞬、値踏みするようにハルカを見ていた。

見た目での年齢は二〇代半ばというところだろうか、軍人らしさを体現したかのような女性だった。

「このまま行きます。よろしいですか」

「ええ、大丈夫です」

ハルカはパツフェルベル曹長の後に続きエレベータの前に立つ。

「少尉殿は駆逐艦での経験はおありですか？」

「初めてではありません。艦艇研修では合計で二〇〇時間程ですけど……」

「そうですか、最近はろくに船に乗ったことのないのまですっかりね。まあ、士官学校で乗らないでは済まないでしょうが」

「曹長殿はここに長いのですか？」

その問いにブルーアイの眼に好奇心を宿らせてハルカを見つめ返す二つの瞳。

何か気に障ってしまったのだろうか、とハルカは身長差に威圧感を感じていることもあり、身をすくめていた。

エレベータのドアが開き、数人の兵士達とすれ違う。

赤毛の曹長の姿に慌てて敬礼して去っていく。

二人はエレベータに乗り込み、ハルカは操作をパツフェルベル曹

長に任せていた。

艦内の構造はまだ正確に覚えてはいなかった。

「一年になります。その前は……帝国にいました。向こうでも軍人でした」

「あ……そうでしたか、すみません」

「謝るようなことではありません。私は軍人であると同時に同盟の市民ですから、と言っても、私自身はまだそういうものに慣れてるわけでもありません。それに、帝国にいたときは同盟と戦うことに何の抵抗も持っていないませんでしたね。ここにいるのは多かれ少なかれ、そういった連中ばかりです。帝国亡命者の多いところに赴任したがる士官も多くありませんし」

「はあ……」

「すみません。でもこれは言っておかないといけないので、決して少尉に対して含みがあるわけではありません。我々は少尉を歓迎しています」

到着音がしてエレベーターを出ると、曹長はまっすぐ食堂へと向かっていく。

扉の前で止まり、ハルカの方を振り向いた。

「まあ、そういうわけで、私らは私らがいるところが故郷です。まあ、ある意味ここが故郷というわけです。いいですか、開けますよ？」

「はい？」

扉が開くと同時にクラッカーが鳴り響き、薄く火薬の匂いが鼻腔を刺激する。

室内には女性兵士達数名と、アマーリエの姿もあった。

ようこそ、アッテンボロー少尉、とチョコレートで書かれたケー

キを持った、小柄な赤みを帯びた金髪の少女、リーゼロッテが飛び切りの笑顔で出迎えた。

「あー、一応、これがここ流の挨拶ってやつです」

驚きに呆けてしまったハルカに、赤毛の曹長がぎこちなく片目を瞑って見せるとクラッカーの帯を引いた。

【？】

ゴッドフリード・ドレイヤー中尉が通路で技術士官に艦長の居場所を尋ねると、ガームリヒ中尉ならまだ艦橋にいましたよ、と告げられ、ありがとう、と答えると足早にそちらに向かって歩いていた。白髪にも似たシルバーグレイの中尉はまだ若く、この駆逐艦タイガーフットを切り盛りする実質のナンバー2で副官という立ち回りだった。

身長は一八〇センチ、細身の体だが軍人らしく引き締まった体つきで、艦内の色男としては一番だという、本人にとってはさほど嬉しくもない評価を得ていた。

特徴的なのはその細い眼で、糸目と言ってもよい目つきは表情が読みにくく、何を考えているのかわからない男でもあった。

荒くれ者が多い第三七戦隊の中では人当たりのいい対人的な素養が見込まれて、今の副官という立場に収まっていた。

ゴッドフリードが艦橋に立ち入ると、照明が落とされた薄暗い艦橋の指揮卓前に一人の二メートルはある巨漢の男が腕を組んで、青白い光を発するモニターを睨みつけていた。

タイガーフットの艦長、フランツペーター・ガームリヒ中尉だった。

ゴッドフリードが近くによると、ペーターが振り向きもせずにお

前か、と声をかけた。

「うちの女性士官達がケーキを焼いたそうだが行かないのか？」

「いらん、甘いものは嫌いでね」

「新任の歓迎会も兼ねてるんだが、一言くらいなんかあってもよくないか？」

「そっちの挨拶は済ませてるからな。俺みたいのがいても邪魔なだけだ」

前を向いたまま、ふんと鼻をかんだペーターにゴッドフリードは苦笑する。

こういうところで遠慮をする細かさがこの男にはあった。

意外と些細なことを気にするのだが、見た目の印象から、大概の者は第一印象から、中身もそのような男であろうという感想を抱く。粗野で野蛮な男が仮にも駆逐艦の艦長になれるわけもない。

いつも過小評価される男だった。

それに対して、自分はいつも過大といってもよい評価を受けていた。

二人は士官学校を共に卒業した仲であった。

ペーターの成績は中の上で、ゴッドフリードが常に上の成績だったが、それでもゴッドフリードは常にペーターに見るべきものがあると思っていた。

事実、実戦におけるペーターの鼻はよく利いて、実利に向いていると直感すればその通りに行動する男であった。

それがよかれ悪かれ、指揮官としての能力に繋がっているのだと思っていた。

卒業後、二人は別々の赴任地へ勤務となり、いくつかの任務の後にエル・ファシルに配属されたとき、二人は駆逐艦タイガーフット

で再会したのだ。

以来、この二人はタイガーフットに愛着を持つようになっていた。元帝国人であるという出自はどうでもよい足かせであったが、たまに足を引っ張りたがる連中にいらぬことを勘ぐられるのだ。

それがこの繊細な男に影響を与えてしまう。

人一倍、己が身を寄せるものに愛着を抱く男でもあった。

「ようやく宇宙だな。こいつも出たがってるだろうな」

「ああ」

隣に並び、天井を見上げるゴッドフリードに釣られるように、ペーターも無機質な天井を見上げてみせた。

「人員がようやく揃ったところでもあるし、いつまでも遊んではいられないか」

「フン」

「機嫌が悪いな、ペーター？」

「演習プログラムの内容見たか？ ひどいもんさ。俺達はカーニバルの出し物じゃない」

「艦隊運動演習だと通達が来ているが？」

「ただの政治ショーだよ。生中継らしいぜ、政治家も参列してのな」

ペーターが鼻で笑ってみせる。

「なるほどね。どうも貧乏くじだな。いつまでもこんなところにはいたくないな」

「前線に行きたいのか？」

「馬鹿、ここだって前線だろ？ 俺が言いたいののは、俺達をもっとうまく使ってくれて、生きて返してくれる司令官ってことだ。リンチは駄目だ。あの男は俺達を殺す」

「いっそ、亡命でもするか？」

「本気じゃないだろ？」

「まあな……帝国だろうがフェザーンだろうが同じさ。俺達は軍人だ」

二人の視線が絡み合って、先に息を吐いたのはゴッドフリードだった。

「行こうぜ、俺は腹が減ってるんだ。肉も焼いてるから腹に入れようぜ。今ならケーキ2ホールはいけるね」

「酒はあるか？」

「お前は俺の監視付きでしばらく禁酒だ」

しょげたペーターの肩を叩いて、二人は揃って艦橋を後にした。

宇宙暦七八八年、帝国歴四七九年、五月一日。

元帝国人からなるエル・ファシル駐留艦隊、第三七戦隊は宇宙勤務への復帰を命ぜられる。

エル・ファシルに嵐のまえぶれとなる風が吹こうとしていた。

【3】第三七戦隊へ―後編―（後書き）

タイトル変更

嵐のまえぶれは次で使うかも

【4】嵐のまえぶれ―前編―（前書き）

■登場人物

アーサー・リンチ（少将／エル・ファシル警備艦隊司令）

デクスター・ルーサー・デッカー（エル・ファシル政治家）

ヤン・ウェンリー（21才／中尉）

*オリキャラの名前はランダムルーレットで作っています

【4】嵐のまえぶれ―前編―

【？】

銀河帝国最大の防衛拠点があるイゼルローン回廊は狭く、長きに渡る戦いの中でも同盟の艦隊がイゼルローン回廊を越え、銀河帝国の領土に侵攻したことはなかった。

第一の理由として、自由惑星同盟が人民政治である民主主義を掲げ守る専守防衛に徹する方針を建国以来貫いてきたからであり、距離と時間という、埋めがたい空間的なものを帝国との間に置くことによって銀河帝国の侵攻を妨げてきたからである。

さらに両国家間の絶対的な国力差から、イゼルローン回廊より向こう側へ積極的に軍事的な目を向けさせなかったのも事実だった。

銀河帝国がイゼルローン回廊に建設した防衛拠点はイゼルローン要塞と呼ばれ、現在までに数度、要塞を落とさんとする自由惑星同盟の艦隊を打ち破っていた。

人口五〇〇万、収容艦数一万五〇〇〇を数え、一国家に匹敵する威容を誇っていた。

最大の前線重要基地であり、難攻不落の落ちない要塞として、イゼルローン要塞の名を轟かせていたのである。

しかし帝国はそれより先に積極的に侵攻艦隊を向けることなく、時たま発生する偶発的な艦隊戦を繰り返すのみで、同盟領土内での大きな戦いはここ数年行われてこなかった。

イゼルローンよりヴァンフリート、アスターテ。

アスターテを境にダゴン、ドーリア、パルンティア、そしてエル・ファシルの四星系へと通じ、エル・ファシルも対銀河帝国の重要な前線基地の一つであった。

自由惑星同盟がイゼルローン要塞のような巨大な軍事拠点と万の艦艇を収容する前線要塞を持ち得なかったのは、専守防衛の信条もあったが、何よりも国力的に要塞建設と艦隊編成を同時に行う余裕を持ち得なかったところにあった。

また、一大軍事拠点を持つことによる軍部の増長を恐れた政治家達の懸念から、要塞は同盟内には不要とされてきたのである。

よって辺境における前線基地となる惑星エル・ファシルは、駐留する警備艦隊に対して物資を提供することを強制的に、余儀なくされる立場となっていた。

多かれ少なかれ辺境星系の惑星はそれを許容するしかなかったし、帝国軍のこない地においても、海賊の出没と略奪から身を守るために軍に頼らざるを得なかったのである。

自治制を維持する地方政権の多くが軍事的な制宙権を持ち得なかったことから、軍内部を掌握することが政治権力者の実力を示すようになっていた。

ときにそれが過剰な賄賂や不正の温床となっていたにも関わらずである。

——エル・ファシル駐留艦隊・司令官室——

「中々壮観ではないかね、一〇〇〇の艦隊が揃っているさまというもの。そうだリンチ君、式典用にエル・ファシルの字を象った艦隊図を作るといのはどうかね？ さも映えるだろうな、生中継で」

リンチ少将の前で剥げた背広姿の男がククツクと笑ってみせた。

男の品のない笑いにリンチ少将も愛想笑いを返していた。

デクスター・ルーサー・デッカーというのが目の前にいるこの男の名前だった。

エル・ファシル議会の議員で、エル・ファシルでは大物政治家として名前を知られていた。

その地位のためになら何でもしてきたという噂もあり、何かと話題の絶えない人物でもあったから、訪問される側も警戒心と好奇心を持ってこの来訪者を迎えていたのである。

当の訪問された本人は戸惑いと焦りの中にいたのだが。

司令官室の大きなモニターには数百を越える艦隊が写っており、その前に二人は立っていた。

「結構ですが、しかしさすがに時間が足りませんな。議員殿が次の選挙で議長に選ばれば式典で披露できる機会があるかもしれない」

「わしがエル・ファシルの議長かね？　ククク、それは少し気が早いな。しかしバックにリンチ少将がいてくれれば鬼に何とやらではないかね？」

デッカー議員の言葉に乾いた笑みをリンチ少将は貼り付けていた。リンチ少将は言葉の意味を図りかねていた。

この男はさらに何を要求するつもりなのだ？

「そうそう、この間の贈り物はどうだったかね？　随分と楽しんでもらったようだが、いかんいかんね、こんなものを不用意に撮られては……」

懐から取り出した袋から数枚の写真をデッカー議員はリンチ少将に手渡す。

それを見たリンチ少将の表情がみるみる強張って顔面蒼白になっていた。

彼は一步下がるとリンチ少将の顔色を覗き込むように眺め、おおむね期待通りの反応に、表情を変えずにタバコを取り出して吸い始

めた。

写真を持つリンチ少将の手が振るえ、背筋に冷たいものが流れていたが、沈黙でもって平静を装うのがやつのことであった。

「少将には奥さんと子どももいるだろうに、火遊びが表沙汰になるのは不味かろうと、部下を使って回収させましたがね。表沙汰になる前でよかったですなあ、本当に」

わざとらしいほど口元を吊り上げて、そのむき出しになった歯は嫌らしく臭気を発して、デッカー議員はリンチ少将の目の前で笑って見せた。

怖気に震えてリンチ少将は目をそらす。

あまりにも醜悪で生理的な嫌悪を感じたのである。

「なにとぞ宜しくお願いしますよ、少将。わしの議員の任期も長くない。議員になって四〇年、最後に一花咲かせるのも悪くないですからな」

含み笑いを持たせたデッカー議員がリンチ少将から身を離し、モニタを見上げる。

その背中を忌々しそうにリンチ少将が睨みつける。

「この写真のネガは？」

「勿論、こちらで厳重に保管してあります。今回の演習が終ったらリンチ少将に丸ごとお返ししますとも」

「性質の悪い脅しではないのか、これは？」

「ほう、脅しとな？　いつわしが脅しましたかな？　少将の身から出た錆をわしが拭って差し上げたんですよ。こちらはあなたの便宜を図って差し上げたんです。今まで分のこちらへの見返りをいただきたいものですなあ」

それが次期エル・ファシル議長の座か、とリンチ少将は内心吐き捨てた。

どこまでも薄汚い男だった。

わずかばかりの金と女でこんなことになるとは、と身を持ち崩してしまった己の不甲斐なさに歯を噛み締める。

だがもうこの男に関わってしまった。

どっぷりと甘い蜜を吸わされて、引き返すなどできそうもなかった。

内心、罪悪感から妻と子に詫びを入れるが、妻がどのような顔をしているのか、彼には思い浮かべることさえできなかった。

議員が去って、呆けたように席に座り込むと、机の上の写真をただ眺めていた。

不意に怒りが込み上げて写真を破り捨てると、一心不乱に髪をかきむしって叫んでいた。

【？】

——アスターテ星系　五月末明——

暗黒の空間に光点のごとく現れた無数の艦隊が、宇宙の深淵の中を群れを成して航行していた。

それらの艦艇は知る者がよく見れば大型艦が極端に少なく、小型艦、中型艦を集めた機動性に優れた艦隊編成であることを見抜いただろう。

隠密裏に通常航行ルートを外した経路を辿ったそれらの艦隊は、一歩間違えば宇宙の迷子になる可能性を賭して作戦に望んでいた。

帝国軍が誇るイゼルローン要塞を発した約三〇〇〇からなる艦隊は、その目的を辺境星域の制圧と定め、入念な下準備の後にアスターテ星系へと侵入を開始していた。

彼らが目指すのはエル・ファシルであった。

自由惑星同盟――叛徒からの辺境の解放を目的とし、この機に地方宙域に前線を推し進めようとする、三〇〇〇という艦隊の規模の割りに戦略的な価値を含んだ帝国側の作戦であった。

ともすれば、今までの消極的ともいえた帝国軍の動きに対して、同盟側は散発的な艦隊遭遇戦を繰り返すことが多かったから、一惑星の完全制圧を目的とした侵攻作戦は、帝国側がここ数年で見せる初めての動きでもあった。

水面下における諜報部隊の働きにより、エル・ファシルが手薄であるとの情報を元に作戦が組み立てられていた。

「これを機に叛徒どもの分裂をも図るのだ。作戦が成功すればアスターテからの侵攻はこれまで以上に容易くなる。彼奴らの咽喉元にナイフを突きつけたようなものだ」

艦隊司令官が言葉を発して参謀が肯く。

「彼らに楔を打ち込んでやりましょう。我々が無為に要塞に引きこもる無能ではないことを思い知らせるのです」

「卿が作戦立案者だ。私はただアンチヨコを読んでいるだけなのに、上がこの作戦を容認したときは驚いたものだ」

「閣下の人望あればこそです。我々には運があったと見るべきでしょう。もつともこの作戦が最後まで終わればですが」

「うむ、エル・ファシルの駐留艦隊を完膚なきまでに叩きのめし、制圧するのだ」

参謀と共に艦隊司令官が前方のモニターに映る宇宙の闇を見つめた。

通信士官が振り返り、新しい情報を告げた。

「閣下、哨戒艇からの報告によりますと、叛徒は風上の兎とのこと。我等の動きに気がついた様子は見られないと」

艦隊司令官は鷹揚に肯いてみせる。

「よし、作戦通りだ。我が艦隊は先行部隊一〇〇〇を以ってエル・ファシル侵攻作戦を開始する。後続部隊はアステロイドベルト地帯に潜み、順を追って作戦行動に移れ。決して功を焦って慌てるなよ、機を逃せば叛徒に反撃の機会を与えることになる」

「承知いたしました、閣下！」

傍に控えていた幕僚達が一斉に敬礼し、艦隊司令官は虚空を睥睨みつけた。

すでに戦いは始まっていた。

【？】

銀河帝国の連中は非公式な場では同盟のことを叛徒と呼ぶが、その叛徒と称される我々が、かつて自由惑星同盟を建国したアーレ・ハインセンやそれを支えていた人々と同じ精神とハングリーさを持っていたのは遠い過去のことには過ぎない。

今の政治家や中央にいる連中に、叛徒と呼ばれることをむしろ誇りと思う連中がどれだけいることだろうか？

いないな、確実にゼロだろう。

今のハインセンにしているのはどうにかして生き残ろうとあがくネズミ達しかない。

口にすれば痛烈な批判だが、思うだけなら自由だ。

私は愛国主義者ではないが、今の同盟が真に守るべき象徴は失われて久しく、ただあるとすれば、それは自らの内で育った民主主義を守るただけだった。

個人の自由とはなんだろう？ 自由に主張して生きること、自由に考えること、守りたいもののために戦うこと……

艦橋から望めるモニタ群をヤンは退屈そうに眺めていた。

駐留艦隊の最高責任者である艦隊司令官殿は、先程訪れた重要な訪問者と二人きりで司令官室に籠っており、中々戻ってきそうになかった。

あの男はよくないな。

ヤンは小柄で剥げた男を見て一目で誰なのかわかった。

デクスター・ルーサー・デッカーという名の悪名高い政治屋だった。

政治家ではない政治屋だ。

権力を自らの地位のために利用する、厚顔無恥で恥知らずな人種だ。

ハイネセンの中央にもそんな連中は腐るほど存在するが、エル・ファシルでは大物と呼ばれている一人だった。

ヤンはこの手の連中が虫唾が走るほど大嫌いであった。

何でもってあの政治屋が司令官に用事があるのか？

考えるだけ馬鹿馬鹿しい気がしないでもない。

今回の演習事態が茶番であり、デッカーという男が自らの政治宣伝のために仕組んだものだったからだ。

演習自体は悪いものではないのだが、露骨にテレビ局の生中継が入るとなれば、それはもう軍事演習の目的の意味をなくした茶番劇に過ぎない。

本来であれば到底許される類のものでもなく、軍隊の規律を無視した政治家の越権行為と批判されてしかるべきものだった。

しかし軍部はそれを許容した。

したからにはどんな理不尽であろうと実行される。

地方政権と駐留部隊の間にある歪がすぐ目の前にあった。

これを許すこと、それは民主主義の否定に他ならない。

信念と意志を持たない司令官に率いられる軍隊とはこうも容易く秩序を崩壊させるのだ。

ため息をついて、ヤンはベレー帽を深くかぶりなおした。

おそらく、何を具申してもリンチ少将は動くまい。

たかが一中尉であるし、嫌われているとなるとなおさらで、諫めてもどうにもならないし、聞く耳など持たないことだろう。

だが、もしこんなときに敵が攻めてきたらどうする、いやどうなるだろうか？

最悪だろう、とその想像を堅くする。

のん気に軍事演習などしている場合ではないのだ。

分散して警備パトロールに当たっているはずの艦艇まで呼び寄せられていたから、もし敵が侵入するとしたら今が絶好の機会だろう。一〇〇〇の艦隊も不意をつかれればあっという間に瓦解してしまうことだろう。

最悪すぎる想像にヤンは悲観主義的過ぎるかと思いをかいていた。

昼寝をしても演習は終る。

やることのない自分はいつも通り過ごすだけだ。

ごくつぶしのヤン、かといつの間にか自分につけられていたあだ名を胸の内で呟いた。

【5】嵐のまえぶれ―後編―（前書き）

■登場人物

ハルカ・シャーロット・アッテンボロー（18才／少尉）

アマーリエ・ドレイヤー（22才／准尉）

バルバラ・パツフェルベル（26才／曹長）

リーゼロッテ・エンデ（18才／伍長）

グリーンヒル婦人

フレデリカ・グリーンヒル（14才）

＊オリキヤラの名前はランダムルーレットで作っています

【5】嵐のまえぶれ―後編―

【？】

――五月四日――

駆逐艦タイガーフットが宇宙に舞い戻る前日、女性隊員達でござって、買い出しという名目の半休暇を楽しんでいた。

ハルカが来て二日経っていたが、戦隊に赴任する以前から輸送船で親しくなっていたリーゼロッテ・エンデ伍長と、アマーリエ・ドレイヤー准尉、そしてバルバラ・パツフェルベル曹長を加えた四人が連れ立ってショッピングに興じていた。

女性兵士の中ではハルカが少尉と戦隊では一番上位の士官であったが、この中ではリーゼロッテを除いては一番年下で新参でもあったから、何かと年長者である二人が構うようになっていたせいもあり、さして不自由もなく過ごしていた。

エル・ファシルのデパート内を一通り周り終えたと、アマーリエが勧める珈琲の美味しい店に立ち寄って、落ち着いた雰囲気の意味のよいシックな店内で豆を選び、まだ若い女性店主が豆を挽いて淹れた珈琲の香りを楽しみながら、女同士の気軽な会話を楽しんでいた。

無論、平服である。

休日であっても軍服を着るのが地方勤務に就く軍人の常識になっていたが、それは着るものをあまり多く持つてこないことも原因にもなっていた。

勤務地に長く赴任していれば揃えていくこともできるが、任務に就く際は手荷物一つである。

ハルカも軍服一つで、着替えは若干、しかし平服として着るもの

がほとんど持っていなかったから、身長に近いアマリエに見立ててもらって借りていた。

「へえ、ヤン中尉は紅茶派なのね。ここに連れてきたら宗旨替えをするかしらね？」

「それはないと思いますけど……うーん、先輩はたぶん本物の珈琲の味を知らないと思います」

カウンターの隣の席に座ったアマリエの疑問にハルカは否定の言葉を返ししながら、ヤンの珈琲嫌いがどこから発祥したのか、学生時代にラップ先輩が語ったことを思い出していた。

学生の頃、学食のインスタントコーヒーを泥水だと評して決して飲まなかったから、それ以前の、宇宙放浪時代にまで歴史は遡るはずだという話だった。

ヤン・ウェンリーが士官学校に入る前、父親が死んで、様々な事情から文無しとなってしまい、学費が浮いてただで勉強ができる士官学校を選んだという理由は知っていたが、珈琲嫌いがどこから来るのか、というどうでもよい些細な理由を考察するラップ先輩に、当時はだからどうした、という程度のことしか思い浮かばなかった。だからどうした、は兄のダスティがよく言う口癖である。

しかしこの手の中の液体から漂う本物の豆の芳醇な香りを嗅げば、あのヤン・ウェンリーとて確かに心は揺らぎそうなものである。

ヤンほどでもないが、ハルカは適当に淹れた紅茶や珈琲は好きではなかったが、決して飲まないわけではない。

むしろ本当に飲みたいのは、日本茶といもきんつばの茶請けであったが、本物の珈琲を淹れる店を探すよりも、その組み合わせでお茶を飲む方が大変だった。

この世界では遠き過去にある、日本という国の文化のほとんどがこの時代には受け継がれていなかった。

その痕跡はごく一部に留められるのみである。

すでに転生して十数年、慣れてしまったといえば慣れてしまったから、ほんのときたま、日本を思いこさせてくれるものに出会うと心が和んだ。

多くの場合、コレクターが集めた貿易品の中にそれは紛れ込んでいて、ハルカの給料ではとても手が届かないものばかりであった。

アマーリエの隣向こうのリーゼロッテは個人的に買い込んだ食材に使う香辛料などの説明をバルバラにしていた。

聞いていると、二人の話題はいかに宇宙でホイップクリームをうまく泡立てるか、というケーキ中心の話題に移っていた。

ケーキ、と言えはリーゼロッテである。

先日の歓迎会でリーゼロッテが作ったチョコレートケーキは絶品で、前にした約束を先取りして、ハルカはその味に太鼓判を押したのだった。

見ていて意外なことに、バルバラもその手の話題に感心があるのか、好奇心を満たす質問を投げかけている。

男性のような凛とした雰囲気強く見せているから誤解されがちだが、内面ははるかに女性らしい面を持ち合わせていた。

バルバラに恋人がいらないということにハルカは不思議だと思っていたのだ。

今年二六だというが、すでに成熟した美女の貫禄を持っており、女から見ても十分な魅力をたたえている。

何か理由があるのかな？

鼻先に珈琲の香りを楽しみながら一口液体を口に含んでいた。

その理由が何なのか、思考することは放棄してハルカは思考を切り替える。

「ヤン先輩をここに連れてきてみようかな？」

「あ、デートに誘うの？ 少尉ってヤン中尉が好きなの？」

カップの黒い液体と渦を巻く茶色と白のコンストラストを眺めていたハルカが一人呟くと、横からアマーリエが茶々を入れていた。

「え、ち、違いますよ。先輩もこの本場の珈琲で少しは珈琲が好きになるかな、と思ってですね」

「男を変えるのは女の手腕よ。頑張って」

「アマーリエさん」

ハルカの肩に手を置いてからかい気味に励ますアマーリエ。肩先でその手を押し返して抗議するハルカだった。

でもそう、落ち着いたら本当にヤン先輩を誘ってみようかな、とハルカはちらりとそんなことを考えて、最後の珈琲を飲み干していた。

【？】

「ひったくりだー」

誰かが叫び、人すれ違う路上で何人かが顔を向けていた。

ハルカ達四人がその現場に居合わせたのは、ちょうど店でくつろいだ後、買出しを終了して艦船へ帰投するために店を出た直後であった。

何ごとかとハルカが路上に顔を向けると、目の前をバッグを抱えた男が走り去る瞬間だった。

「待てっ！」

停止を叫んだバルバラが男の前に飛び出すと、男はそれを予測していたかのように路地横のビルの隙間に向かって走りこんでいた。店の前から動かなかった女三人がそこにいた。

「伍長！」

「え？ キヤツ」

リーゼロッテの手を掴んだアマーリエがそのまま引き寄せて、リーゼロッテが抱えていた買い物袋が地面に落ちる。

「チッ！」

窃盗犯の予想外の動きに舌打ちするバルバラ。

男がそのまま走りこみ、ハルカを突き飛ばしたかに見えた。

ハルカの体が沈み込んで、バルバラには一瞬消えたかのように見えた。

次の瞬間、男の体ぐるりと方向を変えて宙を舞っていた。

バルバラを含め、他の二人も動きを止めてそれを眺めていた。

男は投げ飛ばされアスファルトの上に屈していた。

一メートル先に男がひたつた女物のバッグが転がっている。

ふうっ、と一息ついたハルカが顔を上げて、バルバラに頷いてみせた。

ハルカは咄嗟に男の服を掴み、遠心力を利用した動きで男の体を宙に浮かせ、足を払って自分の体ごと回転させて男を地面に叩きつけていた。

そのまま腕を捻り、完全に抵抗する手段を奪ってから背中に膝をつけて固定していた。

男のくぐもった声が体重をかけた脚の下から聞こえるが、手は離さない。

何が起こったのか、それは一瞬のことだったが、それを目撃していた何人かの通行人から拍手が送られていた。

ハルカは恥ずかしさに顔を赤らめる。

何せ咄嗟のことだったのだ。

すぐに後方から走ってくる警官が見えて、男を捕まえたハルカに礼を言う。

後ろから被害者と思われる女性と、息を切らせた若い少女が姿を現した。

おそらく親子であることは見て取れた。

ハルカは警官に男の身柄を引き渡すと、自らの身分を名乗り、後は任せてすぐ近くと同僚達と合流するために下がった。

「やるじゃない」

アマーリエがそう出迎えて、バルバラは明らかにホッとした様子で、リーゼロッテは少し興奮しているようだった。

リーゼロッテがすごい、すごいです、を繰り返して、ハルカの手を握って振るうので、思わず苦笑する。

落とした荷物は無事なようだった。

幸い、買い物袋の中の小瓶にも割れてはいなかったようで安心する。

そのとき、背後から女性の声が投げかけられて、ハルカは振り返っていた。

「あの……」

「はい？」

「先程はありがとうございます」

そう告げて頭を軽く下げたのは窃盗にあっただけの婦人だった。
手に持ったバッグは窃盗犯が持っていたものである。

その横にはまだ少女と言っているいい女の子がいて、ありがとうございます。
とハルカ達に改めて頭を下げる。

「えと、その……どういたしまして」

ハルカも頭を下げるのだが、顔を上げると婦人と目が合って、柔
らかく微笑み返されていた。

「お礼がしたいのですが……」

「いえ、それには及びません。私達は通りがかっただけです。捕ま
えられたのはこちらのバルバラさんの手柄です」

婦人の申し出にハルカが応えると、当のバルバラは憮然とした顔
をハルカにしてみせる。

私に振らないで下さい、とその目がそう語っていた。

その視線がハルカに突き刺さるが、ハルカは知らない振りをして
みせる。

「いや、そのですね……こちらのアッテンボロー少尉が捕まえたの
です。少官はこそ泥を追い込んだだけで、投げ飛ばして捕縛したの
も……」

「まあ、軍の方でしたのね。そうは見えないからってつきり……お二
人のおかげで本当に助かりました。お名前をお教え願えますか？」

ハルカは少し困ってアマーリエに顔を向けると、アマーリエは頷
いて見せた。

婦人の目は明らかにハルカを見ていて、その礼の好意に名乗らな

いのも失礼だった。

「第三七戦隊、駆逐艦タイガーフット所属、少尉、ハルカ・シャーロット・アッテンボローと申します」

「第三七戦隊……アッテンボロー少尉ね。」

口の中で婦人が繰り返す。

「私はグリーンヒルと申します。こちらは娘のフレデリカです」

グリーンヒル婦人が名乗ると少女が前に進み出る。

グリーンヒル……どこかで聞いたことがある名前だった。

薄っすらとした記憶は現実には押し流されてすぐに消えてしまったが。

「今日は少尉さん、フレデリカ・グリーンヒルです。あの、握手してください」

「え？ ええ、はい」

ハルカが差し出した手を緊張気味のフレデリカが握って、二人は視線を合わせていた。

婦人譲りの目をしているなと感じて、ハルカは緊張をほぐして少女に微笑んでいた。

それはわずかな邂逅の時間でしかなかった。

事件に巻き込まれて四人の帰投時間が迫っていたのだ。

それを婦人に告げると、残念、と言うフレデリカの手を握った婦人が四人を見送って、ハルカ達は呼び出した地上車に乗り込んだ。た。

最後にフレデリカが手を振ったので、見えたかわからなかったが、ハルカも車の中から手を振り返していた。
車が走り去り見えなくなるまでフレデリカは手を振っていた。

安らかな休暇は終わりを告げる。

エル・ファシルに風が吹く。

やがてそれは追い風となり、大きな嵐を呼びこもうとしていた。

【？】

【5】嵐のまえぶれ―後編―（後書き）

リーゼが空気になつとる・・・

進行（2／3）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3699x/>

銀河英雄伝説―涼宮遙の転生物語―

2011年11月17日18時24分発行